

愛しい妻よ

北島詩の対位法について

中 西 進

北島の詩は『北島（ペイタオ）詩集』（是永駿編・訳／書肆山田二〇〇九年一月）によって日本語で読むことができる。全四〇二ページにわたる大著から受ける恩恵は莫大だが、一方、今日から見れば、その後の二〇年の詩を知り得ない残念さがある。

そこでここでは、せめて当詩集の最後の一編をあげて、北島詩の秀抜な一端をみることにしよう。

冬を過ごす

めざめれば、北方の松林——  
大地がせわしなく打ち鳴らす太鼓の音  
木々の幹に宿る陽の光の強い酒が  
闇の氷を揺らして  
心は狼の群れの遠吠えとわたりあい声をあげる

風が盗み去るのは風  
冬は大雪の債務のために  
その隠喩よりも大きなものとなる  
郷愁は亡国の君主さながら  
探し求めるのは永遠の迷い、失われしもの

海が生者のために死を悲しみ  
星はかわるがわる愛情を明るく照らす——  
誰が変幻するパノラマの証人なのか  
角笛を待ち望む河  
果樹園の暴動

聞こえるかい、わたしの愛しい妻よ  
手に手をとって老いを迎え

ことば  
語とともに冬眠しよう

交錯する時の光が解けない結び目  
あるいは未完の詩を留めるだろう

そもそも一般的に、詩とはどのように考えられているだろう。たとえばこの詩の中でも冬のことを大雪の債務だという。このように散文では冬というものを大雪の債務というのが詩だと思われているだろうか。たしかに隠喩は詩につきもので、隠喩による言語の飛翔力は詩がもっとも要求するものであろう。この一編の中にも、題名の冬を始めとして詩の中の松林、太鼓、酒、群狼の遠吠えなどなど、隠喩があふれている。

北島が隠喩の見事な使い手であることはいままでもあるまい。しかしそれはともかくとして、さらに大きな言語の使い手であることが重要だと、わたしには思える。

すなわち、これまた北島詩の特徴として指摘されてはいるが、この詩の中にも、

聞こえるかい、わたしの愛しい妻よ

とあるような呼びかけの多いことが、重要だろう。

つまり北島詩の中には対話者がいるのだ。「わたし」と「きみ」、「わたし」と別の「わたし」、主体の「わたし」と客体の「わたし」、あるいは肉体と詩魂などが「わたし」の中につねに包含されている。

こうなると同じ中国の作家で北島と雁行した高行健<sup>ガオ シンジェン</sup>が『霊山』で使用した、「わたし」の交錯も思い浮かべるべきであろうし、日本でも福永武彦が、時間の互換性を用いて『海市』(蜃気楼)を書いたことも、記憶に新しい。

より正しく人間を見るために、北島もこうして自己の二分化やその相関性を計っているのではないか。しかも二分化は、自己を内外から見るとか、明暗を分つとかという簡単なものではない。つねに二分化された「わたし」がそれぞれに文脈<sup>コンテクスト</sup>を曳いて存在しつづける、しかし外見からは単一と見えるものが「わたし」だと、北島は主張するように思える。

T・S・エリオットが唱えた「媒体としての作者」も、同じような状況を示すのかもしれない。北島詩も二分化されたものが組み合わせられ、それぞれのストーリーを紡いでゆく。

ここで多少「冬を過ごす」からのメッセージを二分化によって要約してみよう。

第一連では冬の到来を告げる季節と、その心の群狼との戦いがある。

第二連では冬の風雪と郷愁との葛藤を見つめる。永遠の迷いの中から顔を出す失われしものとは、プルーストの『失われし時を求めて』につながるものだろうか。

しかし詩人は第三連で相反する死や愛を抱いて生きるパノラマの証人を求める。証人とは誰か。証明者こそ、「詩人」である。

その上で終連。詩人は冬眠しようとして「愛しい妻<sup>ひよ</sup>」によびかける。冬眠が詩を「永遠」に委ねる手段だからだ。その上で永遠に未完の詩は、輝かしい時の光の結節にやどる、と詩はしめくくられる。

「愛しい妻」とは詩の魂に他ならない。

じつはこのような北島詩の手法、強いていえば肉体としての自分と輝かしい詩の魂とに自己を二分化して詩を連鎖する叙事詩の構築は、音楽における対位法とよぶのにふさわしいものであろうか。

音楽では独立する旋律を組み合わせる方法を対位法という。

歴史や状況、風景がつづる旋律は、わが生身として時間を背負い、一方の魂—それこそ愛しい妻と作者がよぶものの経過と問答しつつ、みごとに北島は詩を演奏しつづけてきたのではなかったか。

なかんづく、わたしは詩の魂を「愛しい妻」と呼んだ北島の詩の円熟を喜びたい。あの、過去の激越な憤りの中に出発した詩人の、大きな到達点の一つ、ここに明示されているように思うのである。

いまわたしには、未完の詩を無限の彼方のゴールにおいた詩人の眸の輝きが、眩しくてならない。